
RPD 俺の異能

しけたのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R P D 俺の異能

【Nコード】

N 5 4 8 2 K

【作者名】

しけたのり

【あらすじ】

異能力者達が引き起こす様々な事件の中で、少年は自らに秘められた能力に気付く。
異なる力が渦巻く世界で、彼は再びこの世界に秩序を取り戻せるのか？

R P D w o r l d 1. 俺の異能

「千堂さーん。」

「あっ、はいはい。」

くそ、折角良いところなのに。俺にもう少し時間を、婆ちゃ…。

おっと危ない。今連絡をとったらバレちまう。

よし、早いところ確かめてくるか。これがただの病気なのか、そうじゃないのか。

俺は読みかけの本を棚に戻すと、元気いっぱい「精神科」の扉を開いた。

「えーとですね。」

「ああ、分かってますからいいですよ。」

看護師さんに案内された診察室で自分の精神の異常について語ろうとしたら、

何故か制された。汚らしい無精ひげに似合わない、丸ぶち眼鏡の奥の眼は

何を考えてるのか検討もつかないが、一見にして俺の異常を見抜かれた気がした。

この人に任せれば大丈夫、そう思わせる雰囲気を持っているように感じた。

「さっそく、こちらから質問いいですか。」

その言葉に促されるように、俺は返事をしていた。

「では、どうしてこちらの病院を選ばれたのですか？」

「どうしてって、この町にはひとつしかないじゃないですか。ここ以外。」

「隣に同じ様なのあったでしょ。見えませんでした？」

妙な事を聞くひげに少しイライラしたが、その聞き方に少し疑問があった。

「見えなかったって、どういう意味ですか。」

温和な表情は崩さずに、俺の心を震わせる鈍重な声で返してきた。
「どういう意味？　こうすれば分かってもらえるかな。」

この言葉が発せられると同時に、周りの診察室が刹那の間に消えさり、

先生と俺、二人だけの空間になった。

“いや、なったのではなく、だったんだよ”

俺の心を震え上がらせるあの声が、俺の心に響き渡る、
いや這いずり回っている様な気さえしてくる。俺の心を読んでいるのか？

この声の重さと気持ち悪さに、これが精神の異常であって欲しいと切に願った。

“異常ねえ、確かにそうだ、でもそれは精神の異常なんかじゃない”

“君は、異なる力を持つ者、異能力者なんだよ”

「異能力者」その言葉は今までと違う意味で俺を震わせた。

昔から周りとは違うのが嫌だった。だからこそ、他人とは異なるものになりたかった。

異能力者、それは俺の憧れだった。

“憧れか、君は変わった考え方の持ち主のようだ、だから気づかなかったのかい、この空間の異常に”

“ここに辿りつくまでにおかしなところなんてたくさんあっただろう”

俺は完全にこの男に精神をコントロールされているらしい。頭の中を探られているようだ。

ここに来るまでの記憶を引き出された。俺が異常を感じて、ここに向かった時からの。

とうとうこの日が来た。待ちに待ったこの日が。

俺の他人とは違う、異なる部分に気づく日を。

いつもなら、鍵をかけた後にもう一つ施錠するところを、鍵一つ

さえ煩わしく何もせず先を急いだ。

ここの病院は様々な分野の医師がいる事で有名なのだが、さほど大きくは無い筈、

それがなかなか着かない。隣の建物の駐輪場と間違えてしまったのか？

だが、少し経つと入り口が見え、その疑念は消えていた。そして、その入り口から時間がかった。

やたらと多い退院患者と、それを見送る医師や看護師が道を塞いでいたからだ。

おめでたい事なのだが、今の俺には病院を出る事より入る方が大事なんだ。

そう自分に言い聞かせると、周りを気にせずにズカズカと進んでいった。

その時、気のせいかな悲しみのこもった視線を感じた。

ようやく入ることができ、受付を済ませると、浮き足だっていた気持ちに余裕ができ、

自然に周りに意識が向いていた。すると、ある事に気付いた。

先程とは逆に、待合室に誰一人としていないのだ。

けれどもそれが珍しいことなのかなんて、普段病院と無縁の俺には分かる筈が無かった。

そして、その意識の矛先が面白そうなタイトルの本に向くと、その本を手に取り読み始めていた。

“そうか、やはり君は無自覚で私の空間にそれも無断で侵入してきていた訳か”

その言葉で俺は、強引に記憶の空間から引きずり戻された。

眼鏡を外した医師の眼は更に鋭く嫌な光を放っていた。

“私の異能は、夢空間の創造”

“私はオリジナルではないが、それでもここは私の空間、君が侵入して来た時点で支配出来た筈だ”

“それが、今こうして空間の支配を解き、君の支配に集中しなければならぬ”

“君は一体何者なんだい？”

いきなりの質問に驚き、「分からない」と正直に答えそうになった。

だが、奴の眼の鋭さと、今もなお放たれている光に、返答次第では命の危うさを感じた。

その恐怖からか、俺は口を開けられずにいた。

しかし、返答の内容以前に、有無さえも関係無いらしく、声も鋭さが増し、凶器の様に俺の心をえぐった。

“私は体の治らない人々の、心だけでも救ってやりたかった”

“だから私は代価を支払ってまでこの異能を手に入れたんだ”

その時、ものすごく強い横風が二人を襲った。その風が医師の両腕を砂のように吹き飛ばした。

“それなのに、お前が踏み荒らしたせいで空間が綻び始めてしまった”

怒号にも似たその叫びは、空間を大きく震わせた。

するとまた強い横風が吹き、先程飛ばされた砂が医師の腕を、いや、鋭利な刀を縁取り始めた。

だんだんと黒く染まっていくそれは、光る眼の対を成しているようだ。

医師がその刀を軽く振ると、シャツ、という空気さえも切り裂いてしまいそうな音がした。

“お前さえ、いなければ”

ブンッ

さっきとは、桁違いの重さを感じる。

その刀を振り下ろした先の空間が切り裂け、その裂け目から元いた診察室が見えた。

俺はその裂け目に走ると、無事に出られた。だが、もう彼は居たのだ。二本の刀をぶらさげて。

「ここから逃げ出すのは、不可能だ。」

気持ちよりも先に、体が動き出していた。手を、足を、思い切り振り続けていた。

けどここは、彼の領域だ、逃げ切れるはずが無い。彼は狂ったかのように笑い、

刀を振り回しながら、ゆっくりと進んでいた。周りの空間が裂け、ずれていった。

思い切り走っている筈の俺に、奴はゆっくりと着実に近づいてきた。絶望的な状況であることに変わりはないのだが、体を動かした事で恐怖が少し消え、ある事を思い出した。婆ちゃんがくれた、お守り袋だ。

昔から周りには異能力者が多かった。その中にいる、能力を持たない俺を心配して

持たせてくれた物だ。わらにもすぎる思いで、お守り袋の口を開けてみた。

するとその中には、刀の柄の様なものが入っていた。

しかし、この袋の大きさから考えて、到底そんなものが入るわけが無い。

だが、そんな細かいことを気にしている場合では無かった。

もう奴は間近に迫っていた。

これに頼るしか、俺には残ってないんだよ。

力の限りその柄を引っ張った。

「うおーりゃー」

確かに少しの期待はあった。婆ちゃんなら、**「時空の管理人」**である婆ちゃんなら

これ位の常識など、ぶち壊してくれると。

俺は刀を握り締めていた。RPGの勇者が持っているようないかにも強そうな刀を。

白銀に輝くその刀は、奴の持つ刀が二本の棒切れに見える程美しく輝いていた。

俺はもう一度強く握りしめて奴を見据えた。
では、もう一度叫ばせていただきますようか。
「やってやろうじゃねーかよー」

world 2. 俺の

説明書、につづく。

R P D w o r l d 2. 俺の説明書

ガキーンッ

豪快な音が周りに響き渡る。一度、奴の刀を防いだだけなのに、もう俺はこいつに勝った気がした。刀の動きなど一切気にせずに、奴の体めがけて、次々に斬撃を放つ。

キキーンッ ズバツズバツ

一瞬たりとも手を休めずに攻め続けた。

自らの斬撃で空間が裂けているのも気付かない程に。

「これが、お前の本性なのか？それとも……」

奴の言葉など耳に入らない。いや、違う。

聞こうとしてないだけだ。ちゃんと俺に届いている。

周りの状況だって分かっている。俺の刀が空間を切り裂いていることも。

止められない。奴を裂くまで、とまらないのか？

“君は一体何者なんだい”

前に聞いたようなフレーズが、頭に浮かんだ。

俺だって知りたいよ。俺が一番知りてーよ。

頼む、誰か俺を止めてくれよ。

そのとき、

ズゴッ

目の前に突如として壁が現れた。そして、聞きなれた声が俺を呼んでいた。

「お兄ちゃんっ。大丈夫？」

一人の少女が変わり果てた兄に駆け寄ってきた。

俺の身を案じていたのか、少し黒い瞳が潤んでいた。

だが、そんな事など今の俺にとってはどうでも良い。

生あるもの、全てが敵なのだ。逃げてくれ、ほitori。今の俺はいつもの俺じゃないんだ。本当にお前に危害を加えてしまう。

そう思ったところで遅かった。すでに目の前の妹に刀を振り下ろしていた。

ガキッ

今始めて、妹が異能力者で良かったと思った。

少女の周りに薄い膜の様なバリアが張られていた。幸い、怪我は無さそうだ。

少女の目は青白く光り、血走っているだろう俺の目とは対照的だ。

けど、俺と同じでいつもの妹とは雰囲気がまるで違った。

そして、彼女は冷たく、落ち着いた面持ちで言い放った。

「今から、あなたの心を解き明かします。『万物の説明書』であるこの私が。^{わたくし}」

R P D w o r l d 3 . 俺の操

作法につづく

R P D w o r l d 3. 俺の操作法

バチッ バチバチ

彼女の周りのバリアから放たれる、青白い光が

強さを増す。俺の刀は進まずにいた。いや、それだけでは無い。

わずかだが、押し戻されていた。これが、ほとりの能力^{ちから}。

俺の精神による支配から逃れ、血のみを求める殺戮人形である今の俺の力は

計り知れない。その空間さえも切り裂くこの刀を、いとも簡単にとめている。

「あなたは、私には勝てない。」

そう言い放つと、バリアを解き、後ろに飛び上がった。

ズサッ

彼女が居た場所に大きな亀裂が入った。

ほとりの両手が青白い光を溜め始める。

「オール・カタログ」

彼女は両手の平をあわせると、横に開いた。

すると、両手の間に何枚もの紙が現れ、

その中から一枚の紙が飛び出した。

「オール・ツール」

そう叫んだ時には、ほとりは大きなペンを抱えていた。

それを、その紙に刺した。

紙から青白い光が溢れ出す。

ペンは姿を変え、青白い刀身の日本刀になった。

彼女は日本刀を構えると、思いがけない言葉を言い放った。

「斉藤先生、兄の体を返してもらいますよ。」

どういうことだ。奴にそんな能力があったのか。

だが、そうだとすれば俺の刀が空間を切り裂けるのにも説明がつく。

「兄さん、協力して。これは、物を切ることはできない。」

「けど、関係を切り離すことはできる。」

「だから、兄さんの体と先生の憎しみを切り離すから、戻ってきて。」

“ ああ、分かったぜ。ほとり。”

口に出すことは出来ないが、精一杯ほとりに届くように返事をした。ほとりは刀に慣れてないのか、先生？と互角の戦いぶりだ。

二人の攻防はかなり続いた。

それでもほとりが押していたのだが、

ほとりの息遣いが荒くなった、疲れてきたようだ。

それに比べ、俺の体は音がしない程ゆっくりな呼吸を保っていた。このままじゃ、ヤバイ。

先生？は白銀の刀を振り上げ、ほとり目掛け、振り落とし……。

“ ほとりーッ”

ズガッ

その時、俺と先生を引き離していた壁が、豪快な音と共に崩れ去った。

そこには、先生を抱えた一人の老婆が立っていた。

“ 婆ちゃん！？”

先生？も俺と同じで、突如として現れた老婆に気を取られた。

その隙に、ほとりは俺から先生？を切り離した。

だがその意識は、先生の体へとは行かず、宙を漂った後に消えた。

「お兄ちゃん。良かった。」

青白い目ではない、いつものほとりだ。

がっちり日本刀を持ってるけどー。

それで抱きつかないでくれー。

でも、まあ戻れて良かったな。

結局、俺の異能って何なんだろう？ いずれ分かるだろうし別にいいか。

「しかしまあ。お前さんの能力は厄介じゃのう。」

「人の意識を自分に宿せるとはな。」

えっ。それって先生の方じゃ。

“ どういうことなんだよー！ ”

つづく

R
P
D

World 4. 俺の憧れ、
に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482k/>

RPD 俺の異能

2010年10月9日02時48分発行